

# 教師としての S.R.ランガナタン

ライブラリアンに転じるまで

吉植 庄栄 (盛岡大学)

## 1. はじめに

インドの図書館学者である S.R.ランガナタン(Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972)の著作を大別すると図書館学の理論書<sup>1</sup>、または図書館業務の実践書<sup>2</sup>・マニュアル的な著作<sup>3</sup>、そして教育に関するもの<sup>4</sup>に大きく分けられる。現在の日本の図書館界の標準的な眼でこれらを見ると、図書館を仕事にした者が教育論を少なからず論じていること自体が特徴的である。また教育に関する著作以外のものにも、しばしば教育に係る言及があり、図書館観の根底に教育観があることがよく分かる。

加えて、これら教育に関する著作や言及は、20世紀初頭に世界的な流行を見せた新教育運動の影響を大きく受けている内容である。インドの教育は今でも暗記型・詰め込み型が主流<sup>5</sup>であるのに対し、新教育運動の子ども中心主義、経験重視主義に則ること自体も、非常に特徴的なことである。ランガナタンは晩年、「教育の専門職として長く働いた結果、現場の実践から教育とは、結局自己教育であるべきである。」<sup>6</sup>と述懐しているが、注入型ではなく自律

---

<sup>1</sup> *The five laws of library science*. 2nd ed., Asia Publishing House, c1963, 449 p.や、*Prolegomena to library classification* ; assisted by M.A. Gopinath. 3rd ed., Asia Publishing House, 1967, 640 p., (Ranganathan series in library science, 20).らが挙げられる。

<sup>2</sup> *Reference service*. 2nd ed., Asia Publishing House, 1961, 432 p., (Ranganathan series in library science, 8).や、*Library book selection ; assisted by M.A. Gopinath*. 2nd ed., Asia Publishing House, c1966, 436 p., (Ranganathan series in library science, no. 16).らが挙げられる。

<sup>3</sup> *Library manual : for library authorities, librarians and honorary library workers*. 2nd ed., Asia Publishing House, 1960, 415 p., (Ranganathan series in library science, 6)(Madras Library Association publication series, 25).や、*Library administration*. 2nd ed. Asia Publishing House, 1959, 678 p., (Ranganathan series in library science, 3).らが挙げられる。

<sup>4</sup> *New education and school library*. Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, 510 p., (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4).と *Education for leisure*. 4th ed. Asia Publishing House, 1961, 179 p., (Ranganathan series in library science, 8).である。

<sup>5</sup> 山下博司著. インド人の「力」. 講談社, 2016, p.12-25. (講談社現代新書, 2354).

<sup>6</sup> S.R.Ranganathan. *Documentation: genesis and development*. Vikas Pub. House, 1973, p.30,

型こそ教育であるというこの確信は、いつの時代から持っていたものなのであろうか。

本稿はランガナタンの伝記や著作を基に、31歳でマドラス大学図書館へ転職する以前、生誕から教師時代までの経歴を整理し、ランガナタンの教育観形成の背景や由来を検討するものである。この作業によって、図書館で勤務するようになってもお、教育と密接な図書館像を提示し続けてきたランガナタンの思想の淵源を明らかにしたい。

なお筆者は、平成 29(2017)年度に東北大学附属図書館からランガナタンが一生涯の大半を過ごし活躍した南インドに派遣され、現地の事跡を調査する機会を得た。適宜、調査で得た情報も加えて報告する<sup>7</sup>。

## 2. 本稿で取り上げる文献

ランガナタンの代表的な伝記には、自伝と子息が執筆した以下の2作品がある。

- S.R. Ranganathan. *A Librarian looks back : an autobiography of Dr. S.R. Ranganathan*. appended with an evaluation of his life and work by P.N. Kaula. ABC Publishing House, 1992, 485 p.
- Ranganathan Yogeshwar. *S.R. Ranganathan, pragmatic philosopher of information science: a personal biography*. Bhavan, 2001, 402 p.

また日本語の文献では、ランガナタンの経歴について以下のものを主に参考にした。

- ランガナタン [著]; 竹内愨解説. 図書館の歩む道 : ランガナタン博士の五法則に学ぶ. 日本図書館協会, 2010, p.28-52.

そのほかランガナタンの著作にしばしば散見される自身の回想を、主に以下の作品から取り上げる。

- S.R. Ranganathan. *Reference service*. 2nd.ed., Asia Publishing House, 1961, 432 p.
- S.R. Ranganathan.; assisted by P. Jayarajan. *New education and school library*. Ess

---

(Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 3).

<sup>7</sup> 現地調査については、拙稿.S.R. ランガナタンの足跡を辿って：生誕地から終焉の地までの図書館を中心に. 東北大学附属図書館調査研究室年報 = The Annual Reports of the Tohoku University Library. 2018, 5, p.115-129.にて詳しい報告を行った。

Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, 510 p., (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4).

### 3. 出生からライブラリアンに転じるまでのランガナタンの経歴概略

本章では、31歳で図書館勤務に転じるまでのランガナタンの経歴を概略するほか、その当時の英領インドの情勢について触れ、ランガナタンがどのような精神形成期間を過ごしたかを概観する。

#### 3.1 関連地図（南インド：タミル・ナドゥ州主要部）

産まれてから1945年に北インドのベナレス（現ウッタル・プラデーシュ州ヴァーラーナシー）に異動する50代まで、1年のイギリス留学を除くと基本的に南インド（現在のタミル・ナドゥ州かカルナータカ州）の中で生活していた。主な居住経験がある都市は、以下の図1の通りである。

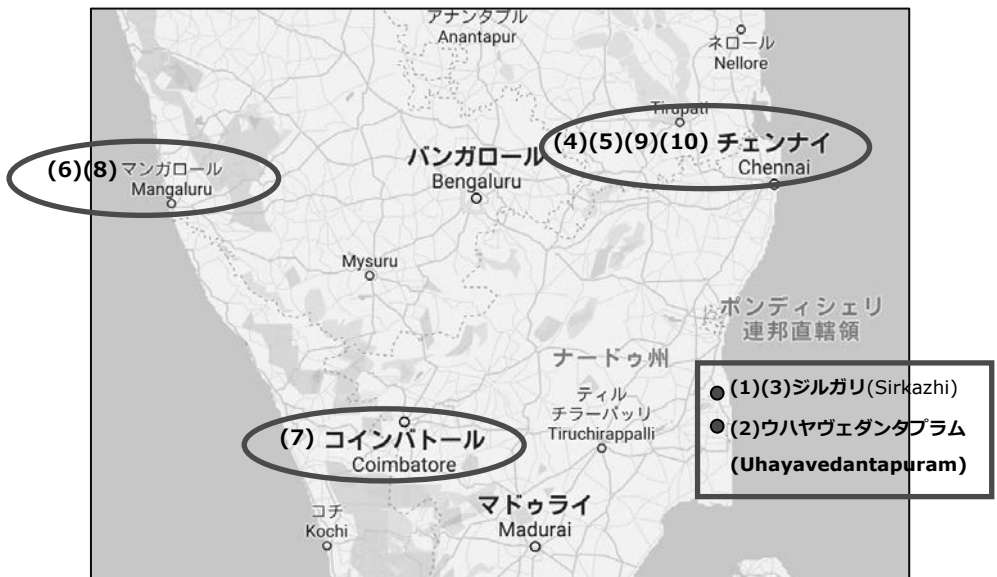


図1 南インド：タミル・ナドゥ州主要部<sup>8</sup>

<sup>8</sup> Google Map. (参照 2020-11-24).

### 3.2 略年譜<sup>9</sup>と地図上の位置

以下、出生から31歳にマドラス大学のライブラリアンに転じるまでの略年譜を示す。番号と図1の場所は対応させている。

(1)1892年8月9日（現在は公式で8月12日とされることが多い<sup>10</sup>）午前9時30頃に誕生

生誕地（母の実家）：マドラス州タンジョール管区シヤリ

(Shiyali, Tanjur District, Madras State)

※現在は、タミル・ナドゥ州ナガパティナム管区ジルガリ

(Sirkazhi, Nagapattinam District, Tamil Nadu)

(2)実家（父の家）：ウハヤヴェダントブラム (Uhayavedantapuram)

(3)1897年～1908年：初等・中等教育：5歳～16歳

シヤリの初等教育学校を経て(?)Subhanayaka Mudailiar's Hindu High School に進学

(4)1909年～1916年：高等教育：17歳～24歳

マドラスのマドラス・クリスチャン・カレッジ(Madras Christian College)

(5)1916年～1917年：教員養成課程：24歳～25歳

マドラスのサイダペット(Madras, Saidapet)の教員養成カレッジ(Teacher's College)

(6)1917年7月～1920年6月：25歳～27歳

州立マンガロール・カレッジ (Government College, Mangalore)、数学助講師 (Assistant Lecturer)

(7)1920年7月～12月：27歳～28歳

州立コインバトール・カレッジ(Government College, Coimbatore)、数学助講師

(8)1921年1月～7月：28歳

州立マンガロール・カレッジ、数学助講師

(9)1921年7月7日～1924年1月4日：28歳～31歳

マドラス・プレジデンシィ・カレッジ(Presidency College, Madras)

数学助教授(Assistant Professor)

(10)1924年1月5日～：31歳

---

<sup>9</sup> Ranganathan. *A Librarian looks back*. 1992, p.455-456.を元に作成した。

<sup>10</sup> 竹内, 図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ, 2010, p.47によると「現在の暦」とある。これが由来で8月12日は、インドの図書館記念日になっている。

### 3.3 当時のマドラス州について

17世紀頃からインドに侵出したイギリスは、ライバルであるフランスを追い落とし着々と東インド会社を介してインドの植民地化を進めて行った。しかしインド大反乱(Indian Rebellion, 1857-1859)をきっかけにイギリスは、東インド会社による間接支配に限界を感じ、インドを直轄植民地へと移行させる。1877年にはイギリス王がインド皇帝も兼ね、東インド会社は解体され英領インド帝国が成立する。この間に、イギリスはカルカッタ(現コルカタ)、マドラス(現チェンナイ)、ボンベイ(現ムンバイ)をインド支配の3大拠点と位置づけ、開発に力を入れた。

教育面でもそれは現れ、この3大拠点には英語による教育を行う高等教育機関が同時に整備される。マドラスには1857年にロンドン大学を模範とするマドラス大学を開学させ、それを頂点として多数のカレッジとそれに繋がる初等中等教育機関が整備された。この背景<sup>11</sup>にはイギリスのインド統治のための人材をインド人から選抜・養成するという大目的があった。

ランガナタンの学生時代・教師時代である19世紀末・20世紀初頭は、このようなマドラス大学を最高学府とする現地人官僚養成の体制が大学創立50年以上を経て軌道に乗り、初期の卒業生が統治の一員となりつつあった時代である。このような教育階梯を辿り、大学を卒業して教師となったランガナタンも、宗主国イギリスからインド支配の手足になることを期待されていたに違いない。つまりランガナタンの学歴や教師時代の仕事は、背景に英領インド帝国を支える現地人統治層の養成というイギリス側の思惑が色濃くあったことを改めて指摘しておきたい。

ちなみにこのような経歴のためか、ランガナタンが反英運動に身を投じた記録も無ければ、反英的な著作や業績は残っておらず、独立以前は英領インド帝国の高等教育機関を支える官吏兼研究教育者に徹していたと考えるのが妥当である。

### 3.4 名前について

ランガナタンの正式な名前は次の通りである。

---

<sup>11</sup> 本田毅彦. 1880年代英領インドにおける植民地官僚制改革問題について. 史林. 1990, 73(1), p.1-40. 水谷智. 〈比較する主体〉としての植民地帝国: 越境する英領インド教育政策批判と東郷實. 社会科学. 2009, 85, p.1-29. 等を参考にした。

- (1)シヤリ (2)ラマムリタ (3)ランガナタン (4)アヤッル  
(1)Shiyali (2)Ramamrita (3)Ranganathan (4)Ayyar)

これについては以下のように南インドの様々な決まりがある。(Yogeshwar 2001 : p.390, 竹内 2010 : p.278)

(1) シヤリ (出身地)

生誕地である街シヤリから採る。現在は、人々の移動が大きくなり使われなくなった。

(2) ラマムリタ (父の名)

父の名前ラマムリタムから採る。その際に語尾の「an」や「am」は付かない。

(3) ランガナタン (個人名)

元々はランガナータ(Ranganatha)であるが、男子を示す接尾辞「an」を付けるという南インドのタミル地方の習慣に従い「ランガナタン」となる。発音は「ランガナータン」に近い音となる。ちなみに女性名であれば「ambal」を付ける。

(4) アヤッル

出身カーストや出身集団を示す。

現代に至るまで(1)と(4)の命名法は廃れて行き、ランガナタン自身も(4)は使っておらず、子息の代になると(1)も使わなくなり、現在は西洋風の「名前」「(ミドルネーム)」「姓」という形になっている。

## 4. 生誕から学生時代まで

### 4.1 生誕・生家

生まれた街シヤリは、カーヴェリー川のデルタ地帯に位置する小規模の街である。現在のジルガリ (図 2) は、人口約 3 万人程度の小規模な街のままである。父は、N.ラマムリタム・アヤッル (N.Ramamritam Ayyar, 1866-1898)、母は、シータラクシュミ (Sitalakshmi, 1872-1953)である。



図2 ジルガリ（かつてのシヤリ）の街並み（筆者撮影）

文献からはこの時期に関して以下の記載が見える。

- ・北インドから移住してきたヒンドゥー教を信奉するバラモン階級（最上位層）にして、小規模の地主の家に誕生した。父はヒンドゥー古典に詳しく、村人を集めて「ラーマヤナ」を朗誦するような教養人で、ランガナタンもそれを聞いて育った。(竹内 2010 : p.28)
- ・父は 1898 年、ランガナタンが 5 歳の時に恐らく原因はコレラで 32 歳の若さで早世した。弟が 2 名(Natesan と早世した者)、父の死後数か月後に出生した妹 Aviam が居る。(Yogeshwar 2001 : p.91)
- ・1892 年 8 月 9 日の午前 9 時 30 分頃に、シヤリの Vadakku Modavilaga Theru という所にある母方の祖父の家で産まれたという<sup>12</sup>。(Yogeshwar 2001 : p.168)
- ・病弱（喘息）で吃音にも悩まされ、人前で話すのは苦手だったという。(竹内 2010 : p.28)

#### 4.2 初等・中等教育時代(1897 年～1908 年)

実家のウハヤヴェダントプラムを離れて、母の実家があり生誕の地でもあるシヤリの学校に入学した。残念ながらこの 1897 年に入学した初等教育の学校名は今回取り上げた文献には明記されていないので不明である。初等教育

<sup>12</sup> 当出典ではこの日時について、インドの占星術の風習に基づく記録であり、数学者だったかつての同僚の記憶に基づくので正確な情報であると述べている。

修了後、同じ街の Subhanayaka Mudailiar's Hindu High School に入学した<sup>13</sup>。この学校には 6 年間通ったという記載から、1897 年から 1902 年までの間が初等教育学校、1903 年から 1908 年までが Subhanayaka Mudailiar's Hindu High School で学んだ時期と考えられる。



図 3 S.M. Hindu Secondary Higher School (左上：正門、右上：校舎、左下：教室と生徒、右下：校舎の建設プレート<sup>14</sup>) (筆者撮影)

この学校は現在、ジルガリの S.M. Hindu Higher Secondary School となっている。筆者は、この学校へ平成 29(2017)年 10 月に訪問することが叶い、学校図書館と教室を校長の案内で見学することができた (図 3)。

同校の学校図書館は、S.R.ランガナタン記念図書館になっている (図 4)。校舎とは別棟の 2 階建ての黄色い建物であった。同建物には、ランガナタン

<sup>13</sup> この学校は High School であるので、初等教育は別の学校であったと考える方が妥当である。

<sup>14</sup> このプレートによると、この「新校舎」の定礎は 1952 年、オープンは 1954 年とある。ランガナタン自身が学んだ校舎ではなく、在世中訪れたという記録は特に見つからない。



の胸像が掲げられ、その下にタミル語によるプレートが掲げられおり、それによるとこの図書館は1999年12月15日にオープン<sup>15</sup>したようだ。

2階がいわば書庫となっており、中にはガラス戸付きの書棚が壁面に並び鍵がかかっていた。蔵書は英語を中心とした参考図書や学術書であった。通常の図書館のように閲覧席がある訳ではなく、書籍の収納棚以外は何も無く広い空間が広がっていた。入口には鍵がかかっており、通常時には使われていないようであった。



図4 同校 S.R.ランガナタン記念図書館（右上：入口、左上：ランガナタンの胸像と同館由来を示すタミル語のプレート、左下：2階内部、右下：書棚）（筆者撮影）

<sup>15</sup> この建物の落成時にランガナタンの子息であるヨーガシュワル氏が同校を訪れたと校長が述べていたが、実際彼の著作である *S.R. Ranganathan, pragmatic philosopher of information science* に掲載されるジルガリの写真は1999年のものと表記されているので、正しい情報であると考えられる。

筆者が同校の校長にランガナタンの学んだ元の校舎や育った家について質問すると、インドの高度経済成長と人口増の結果、このジルガリの街もこの学校も一変してしまったという。そしてランガナタンの生家も今やどこにあったかも誰も分からないとのことであった<sup>16</sup>。

この初等・中等教育時代については、以下のような記載が文献に見える。

- 20 世紀の初頭の 10 年間、つまり 1900 年から 1910 年の間のことであるが、このシヤリという街には図書館が存在しなかった。ランガナタンが通った学校にも図書館は存在せず、家々には、叙事詩の写本か昔の教科書程度しか図書も無かった。「図書」といえば、学校の教科書のことであり、教師が辞書を持っている程度であった。そのため当時「Library」という単語を誰かが話すことを聞くことは全く無かったとのことである。(Ranganathan 1961 : p.19)
- 1900 年頃 (初等教育時代)、不登校の友人が居た。その友人は大胆で才能ある生徒であり、仲間の友達と遊ぶことを楽しんでいていつでも快活だった。しかし何日か学校に行くふりをして午前 10 時から午後 1 時まで、子どもたちに怖がられていた寺院の塔の一室に孤独にこもって本を読んでいた。午後 1 時以降は几帳面に仲間に加わって一緒に帰ったという。これは、学校の内容が一方的な一斉教育のため、才能あふれる彼にとっては飽きてしまう内容だったからであると解説している。(Ranganathan, c1973 : p.90, p.101)
- 1905 年 (High School 在学中) のある日の夕方、学校図書館の扉が開いていたので勇気を出して入った際、あだ名がモハンマド＝ガズニ(Mohammud of Ghazni<sup>17</sup>)という図書館員と以下のようなやり取りをした。

ラ：教科書とは別の関連資料(extra-reading)が読みたいです。

モ：(赤みを帯びた目でランガナタンをこき下ろすように見た上で) 何が読

---

<sup>16</sup> Yogeshwar. S.R. Ranganathan. 2001.には、p.37 に生誕地シヤリの生家及び Subhanayaka Mudaliar's Hindu High School とされる 1999 年当時も残っていた建物の写真がある。また p.75 と p.90 には父方の実家であるウハヤヴェダントブラムの 1999 年当時の写真が掲載されている。しかし本文に述べたように、調査中には場所を特定することができなかった。

<sup>17</sup> 恐らく中世アフガニスタンの王朝であるカズニ朝の王、マフムード(971-1030)のことと推測される。

みたいんだ？

ラ：せ・・・せ・・・『世界を覗く：日本 (Peeps into the many lands: Japan)』  
です、先生。

モ：最近の成績はどうなんだ？

ラ：50 点中 42 点です、先生。

モ：関連資料を読もうなんて考える前に、あと 8 点取することを考えろ、出  
てけ！

というやり取りをした直後、右のこぶしが頭に下ろされた。逃げ出したランガナタンは二度と図書館に近づかなかったとのことである。ランガナタンはこの逸話を図書館員の資質が大事であるという意味で述懐している。しかし、当時のインドの学校図書館の雰囲気が分かるとともに、ランガナタン自身の当時の成績は比較的に良いが、ずば抜けて優秀という訳ではないことも同時に分かる。(Ranganathan, c1973 : p.114)

- ・病気のため 1907 年（15 歳）は休学した。(Ranganathan 1992 : p.455)
- ・1907 年 7 月、15 歳の時には最初の妻、ルクマニ(Rukmani, 1896-1928、当時 11 歳)と結婚した。(Ranganathan 1992 : p.455)
- ・最初の妻ルクマニのことは記録が少なく不明な点が多いが、タンジョールの法律家であるラーマスワミ アイヤール(Ramaswamy Iyer)の娘ではないかとしている。(Yogeshwar 2001 : p.120)
- ・初等中等教育時代のランガナタンは図書による自己学習ができなかった模様であり<sup>18</sup>、当時の一般的な一斉講義型の教育を受けたと推察される。60 年も前の不登校の才気あふれる友達の例を挙げるなど、彼自身も決してこのような学校を楽しいとは思えなかったようである。

#### 4.3 高等教育時代(1909 年～1916 年)

大学入学資格(Matriculated)を得て、シヤリを離れて北に約 200km 離れた大都会であるマドラスのマドラス・クリスチャン・カレッジ(Madras Christian College)に 1909 年 3 月 18 日に入学し、数学を専攻する。このカレッジは、マドラス大学を構成するものの中でもトップクラスの学校であったとのことで

---

<sup>18</sup> Ranganathan. *Reference service*. 2nd.ed., 1961, p.25.には、「26 代理満足」とあり、「教師としての 6 年半の間、学生が図書館を活用し、かつて自分が学生時代に触れることができなかった大きな満足を得るのを見て、自分も代理満足を得たのである。」と述懐している。

ある。ということは、もし初等・中等教育時代の成績が先述の通り悪くはないがトップクラスでは無かったとすると、高等教育機関進学時には非常に優秀になっていたと考えられる。

数学を専攻するスコットランド人のエドワード B. ロス教授(Edward B. Ross, 1881-1947)に師事した。このロス教授とは余程相性が良い師弟関係だったのか、毎日 3 時間は話をするような仲であり<sup>19</sup>、この親交はカレッジ時代に留まらず、ライブラリアンに転じた後も長く継続される。1913 年に学士号(B A Degree)、1916 年に修士号(M A Degree)を取得した。文献からは以下の記載が見られる。

- このカレッジには、1 つの部屋の中に貸出用の一般図書館(General Library for loan)と学習用の相談図書館(Consulting Library for study)があった。前者は閉架出納式で、学校が指定した日に午前 10 時に貸出を申請すると運が良ければその日の午後 4 時には本を手にすることができた。しかし返却日も決まっているので、借りた本が見当違いのものであると、すぐに返却することができなかった。(Ranganathan 1961 : p.21-22)
- 学士で卒業して就職しようとしたところ、ロス教授の指示で修士課程に進学することになった。学費もロス教授が負担した。(Yogeshwar 2001 : p.101)
- インド数学協会(Indian Mathematical Society)での研究発表(インド数学史について)で、大きな賛辞を会場から得た。その際、会場に居たインド数学協会の創始者である V.R. アヤッル(V. Ramaswamy Ayyar)が追いかけてきて「若いインドが生まれて来た。」と直接激賞される。このきっかけで自信をつけ、その後、吃音症が治ったという。このアヤッルにも数学を習い、大きな影響を受ける。後年、このアヤッルの伝記を著する。(Yogeshwar 2001 : p.105, 竹内 2010: p.47)
- 1914 年、出身地が近いシュリニヴァサ・ラマヌジャン (Srinivasa Aiyangar Ramanujan, 1887-1920)<sup>20</sup>の才能がケンブリッジ大学のハーディ教授(Godfrey

---

<sup>19</sup> S.R.Ranganathan. *Ramanujan : the man and the mathematician*. Asia Publishing House, 1967, p.12, (Great thinkers of India series, 1).

<sup>20</sup> 世界的に有名な天逝した天才数学者である。ハーディ教授に才能を見出され、渡英しケンブリッジ大学で研究を行うが、慣れない風土で心身を病み、インドに帰郷したが、その後ほとんど亡くなった。ランガナタンの 5 才年上でシヤリから 40km 南西にある近隣の街クンバコナム出身である。後日、ランガナタンは図書館学以外の著作では非常に稀であるこのラマヌジャンの伝記(前掲注の作品)を出版しており、このラマヌジャンを特別に敬愛・憧憬し、強くその存在を意識していたことが

Harold Hardy, 1877-1947)に見いだされロンドンに招聘される。この快挙は、マドラスの数学界で話題となりランガナタンは大きな衝撃を受けた。

(Yogeshwar 2001 : p.111-115)

- ・ある日、自分の師であるロス教授をはじめとする3人の教員の鼎談を、周りを取り囲むように他の生徒と聞いていたところ、ラマヌジャンの話になった。教員達は口々に「彼は天下の鬼才だ」と称えていたという。このように、この頃のマドラスのエリート層ではラマヌジャンの話題がよく話されたとのことである<sup>21</sup>。
- ・しかしラマヌジャンは数学の天才・研究者であり、ランガナタンはあくまでも数学教師として養成されてきたこともあり、そこには越えがたい溝があったという。(Yogeshwar 2001 : p.111-115)
- ・修士課程修了後、同じくロス教授の指示で、教員養成カレッジ(Teacher's College)への進学を指示され、1916年7月に入学する。ここで教員免許(L.T Degree)を取得した。(Yogeshwar 2001 : p.101)
- ・当時の教員養成カレッジでは、20世紀初頭に世界中に広まった新教育の概念は一切教育内容になく、話題にも上らなかった。(Ranganathan 1961 : p.23)
- ・この教員養成カレッジでは教授の1人が、ランガナタンが読む本についての助言してくれた。ある時、統計の参考図書を使って、図表を基に発表会での発表をしてはどうかと奨められたので、その指示に従って研究し発表を行った。その結果、統計に関する参考図書の使い方を非常に深く学ぶという良い経験をした。(Ranganathan 1961 : p.21-22)
- ・1916年のこと、マドラスの公共図書館であるコネマラ図書館をしばしば訪問していた。この図書館は博物館に付随する荘厳な建物であった。しかし利用者はほとんどおらず、また利用しても図書を探すのを助力してくれるような図書館員は居らず、非常に苦労したとのことである。(Ranganathan 1961 : p.26)

## 5. 教師時代

修士課程及び教員養成課程を修了し、数学教師として採用されて南インドの様々な学校で教鞭をふるう。文献には以下のような記載がある。

---

分かる。

<sup>21</sup> Ranganathan. *Ramanujan*. p.12.

## 5.1 州立マンガロール・カレッジ時代(1917年7月9日～1920年6月)

- ・数学の助講師として採用され、マドラスから西に約700km離れたマンガロール(現カルナータカ州マンガルール)に赴任した。初年次学生に対して物理学も教えたらしい。(Ranganathan c1973 : p.19)
- ・クラスは少人数(12人程度)で、生徒のレベルがばらばらであった。既定の教科書はある者には簡単過ぎ、ある者には難解であるため、教科書が役に立たず一斉授業が成り立たなかった。校長は理解がある人物で、ランガナタンの好きにやって良いと任せてくれた。

そこで図書を活用し、演習を中心とした個々人のペース・能力に合わせた教育を実施することにした。校長に申請して、様々なレベルと種類の教科書を複数部調達してもらい、学級文庫(Class Library)を設置して、学生に自由に使わせた。レベルや解説が異なる教科書を複数部調達することにして、学生1人1人に分かる教科書を選ばせたりランガナタンが選んでやったりすることで、個性にあう学習を進めさせた。また複数の同じレベルの教科書の解説を比較させ、理解を促進させるようにしたのである。また本来これらの図書は図書館に収蔵されるところ、図書館員の学生への援助に期待ができないので自分の管轄として教室に置き学級文庫とした。

当時は、J.デューイ(John Dewey, 1859-1952)の新教育の考えが世界的には流行していたが、英領インドの教育には影響を与えておらず、ランガナタンが学んだ教員養成カレッジでは、図書や図書館を活用するような教育内容は全く習わなかった。しかし必要は発明の母であり、図書の活用と生徒の主体的な学習と個人指導を中心に行うことは、必要に迫られた結果の自分の工夫であったと述懐している。(Ranganathan 1961 : p.23)

- ・そのほか、学生の課外活動として50名程度の「科学研究会」を立ち上げ、主体的な探求活動を先導した。(学生の主導で、無線通信のデモンストレーションも行ったという。)(Yogeshwar 2001 : p.58-59)
- ・1920年に新教育の考え、つまり教育で図書館を活用するという当時の流行を知る。(おそらくこれが契機となり学ぶ者の主体性を強調する考えを一層強めた。)(Ranganathan c1973 : p.19)

## 5.2 州立コインバトール・カレッジ時代(1920年7月～12月)

マンガロールから東南に約400km離れたコインバトール(現コーヤンブトール)のカレッジに異動する。

- ・このカレッジには学生が主体的に利用できる図書館や、図書館を中心とした教育を実施できるような図書館が無かった。そのためランガナタンは、

図書館用の基本図書の購入リストを校長に提案したが、浪費だと却下された。しかし図書館の有益性に対する確信と若さゆえの怖いもの知らずで、図書が無いと教育上の責任が取れないと文書で訴えた。校長にある日呼び出されて以下の問答をしたとある。

校長（以下：校）：なぜそんなに多くの図書を要求するのかね？

ランガナタン（以下：ラ）：生徒のために使うからです。

校：生徒達が本当に全部の図書を使うかね？

ラ：はい、必ず。

校：もしそうであれば、生徒達は皆、ラマヌジャン<sup>22</sup>になってしまうよ。

ラ：何故、駄目ですか？

校：君はマンガロールの生徒達のような幻想を、ここコインバトールの彼らにも持っているようだ。この生徒たちは才能に乏しい。彼らに大きな期待を持つてはいけないよ。

ラ：チャンスを下さい。生徒それぞれに合う図書を提供することで彼らはきっと飛躍的に成長することでしょう。図書を活用するという私の信念に基づき実行すれば、この学校もきっと良くなるはずです。

校：君は余りに楽観的だな。仕方がない、特例として君の図書購入案を裁可しよう。

その翌年、ランガナタンは州立マンガロール・カレッジへ転出となったが、出発の際に校長から、「数日前に州の教育長が来て、（君の提案による）図書による数学の教育効果が絶大で生徒の成績も良く、初のマドラス大学進学者まで出たことを祝われたよ。」と言われた。続けて「今後、学生の成績が下がっても私の責任にしないでください。何故ならランガナタンは今年度で異動してしまったのだから、と教育長に言ったんだよ。」と激賞される。ランガナタンは「自分は居なくなっても図書館は残り、今後もきっと学生の学習に役立つでしょう。それに自分に図書を購入することを認めてくれた貴方自体の功績でもあるのです。」と返したという。(Ranganathan 1961 : p.108-109, c1973 : p.19-20)

---

<sup>22</sup> 脚注 20 を参照のこと。

### 5.3 州立マンガロール・カレッジ時代（1921年1月～7月）

1921年初頭から前任地であるマンガロールに戻ったが、それも約半年強の一時的なものであった。その後、高等教育時代を過ごしたマドラスに戻る。

### 5.4 マドラス・プレジデンシィ・カレッジ時代（1921年7月9月～1923年12月）

ランガナタンはここで助教授に昇進し地位と給与が安定し、将来を約束された。このカレッジの名前である「プレジデンシィ(Presidency)」は、当時の英領インド帝国の大管区であるマドラス管区(Madras Presidency)の「管区」を示すものであり、その名前から分かるようにこの管区のトップレベルのカレッジであった。(Yogeshwar 2001 : p.36)

文献には以下の活動が見える。

- ・このカレッジの学生は、前任地マンガロールの学生よりも能力が高い生徒ばかりで、教え甲斐があった。生徒の能力は、ここでは上位と下位の差がさらに大きかった。このカレッジには1人の書記と2人の係員が居るそれなりの大きさの図書室があった。しかし職員はただの管理人であり、ランガナタン自身が図書を活用した生徒指導を実施した。(Ranganathan 1961 : p.24-25)
- ・研究教育者として、学協会活動を積極的に行った。例えばマドラス教員組合の数学・科学部事務局(The Mathematical and Science Section of the Madras Teacher's Guild)やプレジデンシィ・カレッジ親睦会(The Lunch Club of the Presidency College)である。(Yogeshwar 2001 : p.36)
- ・その結果、マドラスの知識人階層の中でも高位にある人々に接する機会を多く持ち、様々な経験を得ることになった。その結果、専攻である数学は徐々に重要度を下げて行ったのではないかとする。(Yogeshwar 2001 : p.116)

### 5.5 給与問題から最初のライブラリアンへ

マドラス・プレジデンシィ・カレッジに在勤中の1923年に、ランガナタンは給与改定運動に参加する。当時の英領インド帝国では、イギリス人と現地採用者との待遇に大きな差があった。最高カーストであるバラモン階層のインド人教員報酬ですら、イギリス人のそれと比較して10分の1であり、ランガナタンは非常に不満に思っていた。(Yogeshwar 2001 : p.36, p.116, 竹内2010 : p.29)

1923年7月の午後、財政部門のメンバーに賃金引き上げの交渉に赴いたが、ランガナタンらの要求は通らなかった。この望みが絶たれた結果、諦めるか



転職するかという中、一緒に交渉を行った仲間から新設ポストであり十分な待遇を保障されたマドラス大学初のライブラリアンの採用試験への挑戦を勧められる。この公募ポストは地位が安定した教育・研究職兼管理職であった。教えることを愛していたランガナタンは全く興味を示さなかったが、翌日の金曜日、締切1日前に最終的には断わりきれず、その勧めた仲間の手で申請させられる<sup>23</sup>。(Ranganathan 1992 : p.2)

10月になり他の申請者が図書館委員会の選考担当に挨拶をして面接を行う中、ランガナタンは興味が無いこの公募に対して何も運動を起こさなかった。それを咎められたり周囲の同僚が心配したりする中、態度を変えなかったが、ついに面接に呼ばれた。担当からは多くの志望者の中で唯一ランガナタンが、特定分野の研究を行い論文業績があり、それについて何故、願書に書かなかったのか?と尋ねられた。ランガナタンは答えなかったという。結局この公募には約900人の応募があり、50人と面談が行われ6人にまで絞られた。ランガナタンは、職場の上長に命ぜられて選考委員の部屋を訪問させられる。中には委員の言動にランガナタンが我慢できず口論になることもあった。その委員から、すぐに感情的になる未熟さをたしなめられたりもした。(Ranganathan 1992 : p.2-9)

11月末、選考委員が6人の候補の中からランガナタンを最初のライブラリアンに選出したことを人づてに聞いた。ランガナタン自身は教師の仕事を楽しんでいたため転職について非常に悩んだが、1924年1月に異動となり教師時代は終わる。(Ranganathan 1992 : p.10)



図5 現在のマドラス大学 (左: 正門 右: 図書館内部) (筆者撮影)

<sup>23</sup> その日ランガナタンは授業日であり忙しかったため、勧めた同僚が願書を出しに行ったとある。

## 5.6 当時のマドラス大学図書館とコネマラ公共図書館

コネマラ公共図書館(Connemara Public Library)は、1896年、英領インド帝国マドラス総督であったコネマラ男爵 Robert Bourke(1827-1902)の1890年のプランに従い建設された無料で利用できる公共図書館である。博物館の付随施設として建設された、大理石の彫刻が施され窓にはステンドグラスが当てはめられたヴィクトリア朝時代の壮麗な建物である。建物は2階建てで天井は高く、縦長の長い回廊を持つ(図6)。現在も旧館としてそのまま活用されている。蔵書は英国植民地時代から引き継ぐ典籍類が中心で、通常は入口のカウンターに資料を出納する方式の閉架書庫扱いである。

ランガナタンは、4.3で触れたようにマドラスの街の公共図書館であるこのコネマラ図書館を利用して記録がある。ランガナタンがライブラリアンに転職した1924年当時、マドラス大学の図書館はこのコネマラ公共図書館の一角に間借りしていた。利用者はマドラス大学管轄下のカレッジの教員が中心であったという。1936年のランガナタン主導による新館建築(図5)までこの間借りは続く。つまりランガナタンは高等教育時代やマドラスに戻った教員時代に利用者としてこの図書館をしばしば使っていたのである。1924年にライブラリアンに転職してからは、しばらくここを職場として数々の業績を成していった。

現在のコネマラ図書館はこのヴィクトリア時代からの建物を旧館として、1973年に新たに建設された新館を中心に住民サービスを行っている。現在は約82万冊の資料を所蔵している。



図6 コネマラ公共図書館（旧館）内部（左上：2F 全景、右上：天井の装飾、左下：スタンドグラス、右下：英領時代から継承する蔵書の展示）（筆者撮影）

### 5.7 図書館への転職の経緯と教師の仕事への愛着と執着：本当に転職を嫌がっていたのか？

ランガナタン自身は教師の仕事を愛しており、図書館への転職の話があっても全く興味を示さなかった。また転職後も、図書館業務が余りに退屈でつまらないので、教師に戻れるよう前職のプレジデンシィ・カレッジの校長に相談するくらいであった。

しかし息子の伝記<sup>24</sup>によると、教師の仕事の楽しさにかまけランガナタン

<sup>24</sup> Yogeshwar. S.R. Ranganathan, *pragmatic philosopher of information science*. p.116.

は本当にしたいことをごまかしていたのではないかと書いている。天才数学者ラマヌジャンがランガナタンに与えた影響は非常に大きく、数学を教える仕事を断ち切り、ラマヌジャンのような大きな栄光を得ることができる生涯の仕事に就きたいと潜在的に感じていたとある。

そのためイギリスに渡って学ぶことも条件に入っていたライブラリアンの仕事について、ランガナタン自身は興味が全く無かった訳ではなく、野望を掻き立てるものどこか感じていたのではないであろうか、と述べている。また、給与問題の交渉を一緒に行った同僚も、ランガナタンの大きなことをしたいという密かな野望を感じ取ったがゆえに、新設のライブラリアンの公募に応じることを奨めたとのことである。

## 5.8 ラーマーヤナ

ライブラリアンへの転職問題に悩んでいた1923年11月、ランガナタンはかつて初等中等教育時代(シヤリの Subhanayaka Mudailiar's Hindu High School)の校長を訪ねてこの問題について相談した。しかし校長は、今自分ができることはこれだけである、と述べてヴァルミキ作『ラーマーヤナ』のサンスクリット語版を渡し、これを毎日定期的に読むことで、きっと助けになるだろう、と述べた。

ランガナタンはこの教えに従い、読み終わるたびに表紙にその記録を付けた。開始したのが1923年11月4日で、1949年までの記録が表紙に見て取れる。(Yogeshwar 2001 : p.97, p.119-120)

## 6. 考察

ランガナタンが前半生で直面した経験や出来事について、一斉授業と個別教育、植民地の現地人身分と一生の仕事という観点を4つに分けて論じる。

### 6.1 一斉授業と近代学校の成立<sup>25</sup>

19世紀初頭、イギリスのアンドリュー・ベル(Andrew Bell, 1753-1852)とジョセフ・ランカスター(Joseph Lancaster, 1778-1838)によって創出されたモニターリアルシステムは、1人の教師が100人~1,000人の子どもを、上級生の助手の協力を得て、同時に教育することが可能なものであった。このシステムの結果、教育コストは下がり近代学校制度の道が開けて行く。しかし教室内の

---

<sup>25</sup> 本節は、柳治男著、「学級」の歴史学：自明視された空間を疑う。講談社、2005、(講談社選書メチエ、325)らを参考とした。

騒音や教育の高度化に着いていけない等、様々な要因でこのモニトリアルシステムは短命に終わる。次に、乳幼児教育の実践からサムエル・ウィルダースピン(Samuel Wilderspin, 1791-1866)は、階段教室で1人の教師が多数の生徒と相対して授業を行うギャラリー制を創出した。これはモニトリアルシステムに比べて上級生のモニターを使う必要がなく、効率と低コスト化を一層上げるものであった。その結果、このギャラリー制のスタイルが急速に現在の学校の教室の形に進化し、19世紀末には現代の学校の教室のスタイルがほぼ完成する。この近代学校のスタイルは、19世紀末に明治期の日本に導入されたように、世界的な広まりをみせた。

ランガナタンが育った時代である19世紀末から20世紀初頭は、英領インドでもこの一斉授業のスタイルが定着し、学校教育の定番の形となったころと考えられる。ランガナタンの述懐や伝記の記録によると、不登校の友人や多くの生徒が授業中寝ていたことを紹介することで、生徒の個体差・個性を無視した教育を否定的に捉える、といった内容がしばしば登場する。また子ども時代の成績は決してトップクラスではなかったことを考えると、世界的に広まり定着しつつあった一斉授業自体は、成長とともに乗り越えてきたものの決して信奉すべきもの、愛着が持てるものではなかったことがうかがえる。

一斉授業は、知識の伝達を非常に効率的に低コストで行うという大きなメリットがあるほか、多くの生徒に同じ知識を共有させることが可能である。一方、個人差への対応が弱くなり、優秀な者を飽きさせ、落ちこぼれを生み出す。また、一方向の詰込み型・注入型の教育になりがちである。ランガナタンは、この一斉授業の功罪を児童生徒時代から教師時代にかけて、身をもって体験したと言えよう。

## 6.2 一斉授業の対極にある個別指導

この一斉授業の問題については、対語である個別指導についても考える。この個別指導について、まず前節で取り上げた一斉授業以前の教育スタイルは、個別指導が基本であったこと、次に、インドのヒンドゥー的な師弟関係による個別指導のスタイルについて取り上げる。

前者であるが、ランガナタンが幼少期を過ごした英領インド帝国は、イギリス流の教育行政が整備されつつあったとはいえ、植民地であるため他の先進諸国家に比較すると近代的な学校の整備はまだ途上であった。識字率も全

体の1割以下程度<sup>26</sup>で、現在のような全ての児童が学校で義務教育を受けるにはほど遠い状況であった。そのため学校以外のインフォーマルな教育の力がまだ根強く、家庭や地域の古老に教を乞うことが非常に多かったと考えられる。ランガナタンは名門の高等教育機関に進学したことを考えると、整備途上にあつたマドラス管区の教育システムの中で勝ち上がってきたものの、その背景には個別指導のエートスが根強く残っていたと考えるのは自然である。実際に著作の中では、疑問がある際には近隣に住む知識層から直接色々教授を乞うていた話が出ている。(Ranganathan 1961 : p.19-20)

次にインドのヒンドゥー的な師弟関係についてである。ランガナタンはバラモン階層の出身であるため、師弟関係を重視していたと考えられる。師からの個別指導が、児童生徒を知識のみならず全人格的に成長させる、という観念があつたのではないであろうか。後日、マドラスのクリスチャン・カレッジ時代に、インド人ではないがスコットランド人のロス教授の生徒となり、毎日長時間話すことが日課であつたといつたことは典型的である。

このように大学に進めば1人の教師に就いて、1人1人の個性に合わせた個別指導に転じて行くのは日本の教育も同じであるが、この蜜月さは宗教的な背景にも裏打ちされているものなのではないであろうか。実際、子息であるYogeshwar氏が著したランガナタンの伝記にロス教授はインド人教師ではないのに「グル(The Guru)」とサンスクリット語で「師」「指導者」という意味の語を充てられて称えられている。(Yogeshwar 2001 : p.100)

### 6.3 教育での図書の利活用：一斉授業の欠点克服

ランガナタン自身は図書館で勤務する以前から、教育現場での経験により教育における図書や図書館の効果性について強く理解し、その必要性を認識していた。特に最初の赴任地であるマンガロールでの経験が決定的であつた。学力が異なる少人数の生徒集団に対して、これまで自分が受け、教員養成カレッジで更に手法を学んだと考えられる一斉授業の方法が役に立たない、という状況が彼に工夫を促したのである。この課題は、個々人の能力や学習ペースには個人差があることを無視した一斉授業、そしてそのスタイルを基本

---

<sup>26</sup> 1921年が7.16%、1931年が9.5% (以下、インド国勢調査2011統計から) Office of the Registrar General & Census Commissioner, India, Ministry of Home Affairs, Government of India. "Chapter-6 STATE OF LITERACY, p.103". Provisional Population Totals Paper 1 of 2011 India Series 1, Census 2011 - Census of India. [https://censusindia.gov.in/2011-prov-results/data\\_files/india/Final\\_PPT\\_2011\\_chapter6.pdf](https://censusindia.gov.in/2011-prov-results/data_files/india/Final_PPT_2011_chapter6.pdf), (参照 2021-03-03).

とした学校教育の限界を、彼にまさに突きつけたのである。そこで彼は必要に迫られて誰に習ったものでもなく、それまでの様々な経験から図書や様々な教科書を提供し生徒の自己学習と教員の個別指導によって補完するという処方を考え出した。

本人も当時は図書館に勤務する日が来るとは全く考えていなかったものの、後日教師時代を振り返って「その頃私は、ライブラリアンという将来の職業のために無意識のうちに準備をしていたとは考えもしなかった。」<sup>27</sup>と述べている。また振り返って教師時代の自分と、ライブラリアンになってからの自分は本質的に同じことをしていたと述べるのである。

またマンガロール時代の本人は、必要に迫られて自分で編み出した方法と感じていたが、後の1920年に、19世紀末から世界中に広まったJ.デューイに代表される「新教育」運動の内容に自分の実践が近いことを知って大いに自信を深めた。なお、その後この運動を支持し、戦後に渡米した際、デューイ本人に会いに行くまでになるのである。

#### 6.4 数学教師の限界感とライブラリアンへの転職

一斉授業を基本とする学校教育、植民地の現地登用者に対する差別から来る給与問題など、様々な点でランガナタンは数学教師としての限界を感じていた。また、元々郷里に近いラマヌジャンの世界的な活躍からも、それと比較した彼自身の現在の境遇を嘆いたに違いない。

一方、新設されたマドラス大学図書館のライブラリアンのポストは、給与や地位は高く、宗主国イギリスへの留学も設定されていたこと、そして図書館学自体が新しい学問で、大きな発展の希望を持つものであった。

しかしランガナタン自身は、学生時代の経験も含めて図書館に対して良い印象が全く無かった。そもそも郷里には図書館が無く、学校の図書館では非常に嫌な目にあった。当時のマドラスで使っていた図書館は、利用者も稀であり、自分が図書館で図書を探そうにも非常に探しにくい、やる気のある優秀な図書館員はほとんど見たことは無く、もちろん相談できるような環境に無い、という非常にネガティブなイメージを持っていた。その結果、この求人に対してあまり興味も敬意も感じるができなかったのは当然である。

これは推測だが、ランガナタンが本当に数学を愛し教師に戻りたい願望が潜在的にあったなら、その後の業績に数学研究や発表が散見されても良い。

---

<sup>27</sup> Ranganathan. *Reference service*. 2nd.ed., 1961, p.25.

しかし、一生涯を通して数学に関する著作や活動はその後一切見られない。強いて言うなら、前述のラマヌジャンの伝記を残した程度である。そのためこの数学教師に戻りたい願望はパフォーマンス<sup>28</sup>であり、彼の大いなる野望を隠すものであったことは、十分納得できるものである。

以上から考えるに、ライブラリアンへの転職は非常に本人を悩ませたことである。両方の感情があり、本人でもまとめることができなかつたのではなからうか。そのため近い人の勧めに従い転職の願書を出すことには出す、しかし選考委員への挨拶を欠き上司から叱られる、またその委員へ実際に挨拶に行くと、なりたい気持ちをためらいながら表出するので煮え切らない。そういった態度を委員にたしなめられる、相手が失礼な事を言うとすぐに短気を起こして口論になるといった煮え切らず一貫しない態度が続くのである。

彼の経歴を振り返るとカレッジ時代から数学を学び、教員養成カレッジで数学教師としての養成をされ、6年間数学教師として働いた。1909年から1923年の15年間、数学と一緒に歩んだと言っても過言ではない。31年間の人生の大半を数学とともに過ごしたのである、他の人生をイメージするのは難しいはずだ。また、たとえ学協会活動・学内行政業務に熱意がシフトして数学への関心が下がっても、学生に教える楽しさは変わらなかった。そのような中、新しい仕事に転じるには勇気がある。おまけに元々良いイメージが無い図書館である。いくら地位や待遇が保障されていても、普通はためらうし困惑するに決まっている。そして採用後、本人が危惧したようにつまらない職場であることを、身をもって体験し、やはり教育現場に戻りたいと今度は嘆願するのである。それは当然のことである。

しかし最終的にはイギリス留学にて最新の図書館理論・現場に触れることで考えを改め、図書館の大きな可能性を確信してその後は数学教師に戻る動きや数学の研究を行わなくなるのである。これは彼が好む生徒の個性にそれぞれ合わせた個別指導を、イギリスのような最新の図書館をインドにつくり、それを舞台に図書を活用して展開することが可能である、との確信を得たからではないであろうか。これまでの教師としてのランガナタンの経歴や指向を踏まえると以上のように考えれば、数学から図書館に熱意が移った背景を説明できそうである。

このような背景から、ランガナタンの図書館観は、教えることが好きだっ

---

<sup>28</sup> Ranganathan. *A Librarian looks back*. 1992, p.2 の書き出しも「うまい変装(Good in Disguise)」とあるが、後に振り返ると数学教師としてのかつての自らは自己欺瞞の変装であったことを示したいのではなからうか。



た気持ちを残しながら、自己学習・個別指導を尊ぶ考えを図書館の文脈の中で活かすことで完成していったと考えられる。その結果、図書館を自己教育の砦とし、個別指導を行う図書館員のイメージが定着していく。そして教育自体の本質が図書館を舞台とした自己教育である、という思想に発展するのである。

## 7. おわりに

以上、ランガナタンの出生からライブラリアンに転職するまでの前半生を整理し、その後の活躍や図書館観・教育観への影響を検討した。しかしここまで躊躇したライブラリアンへの転職について、彼が900人もの競合相手を破って選出された理由や背景が諸文献からは明確にできなかった。図書館への転職について、いわゆるロビー活動に対して非常に消極的であった彼を、なぜ選考委員は多数の候補者から選んだのであろうか。竹内(2010)によると、周囲は実直な彼とその能力を高く評価していたからである、としているが果たしてそれだけの理由だけであらうか。また本稿でも触れたが、他の候補者と比べて研究論文を書いていた唯一の存在である、という理由だけでも思えない。今後、ライブラリアン転職後のランガナタンの記録を辿ることで<sup>29</sup>、彼がマドラス大学のライブラリアンに選出された理由や背景を一層明らかにしたいと考える。

## 8. 謝辞

本稿を作成するにあたり国際教養大学中嶋記念図書館館長（特任教授）加藤信哉様に変にお世話になりました。特に脚注29に示した内容を中心に、多くのアドバイスを頂きました。厚く御礼申し上げます。

---

<sup>29</sup> 本研究は、自伝や子息による伝記に基づくことが多く、本人らにとって都合悪いことが書かれていないなどバイアスがかかった資料に基づく。そのため、当件を掘り下げるには全く別視点での探究、例えばマドラス大学の公文書や立場の違う他者の書き残したものを当たらないと見えてこない見込みである。